

### 3. 入学前教育および入学後教育に関する管理栄養士養成大学の事例調査 ーインタビュー調査ー

研究分担者 加藤 昌彦 梶山女学園大学生生活科学部  
研究分担者 榎 裕美 愛知淑徳大学食健康科学部  
研究分担者 市川 陽子 静岡県立大学食品栄養科学部

#### 研究要旨

本研究では、管理栄養士養成施設を対象に実施した「入学前教育および入学後教育に関する管理栄養士養成大学の実態調査」を踏まえ、管理栄養士養成施設において入学前教育および入学後教育を推進している5大学に対し、入学前・入学後教育の体制や取組の状況について、半構造化インタビュー調査を実施した。インタビュー対象となった大学では、各大学の入試方式、入学者の基礎学力、教員のマンパワー等の状況に応じた固有の入学前教育が実践されており、「高大接続」としての入学前教育を重視している大学が多く認められた。一方、入学後教育については、管理栄養士養成の専門基礎分野の学修に繋げる理科の科目を、各大学の規模や組織に応じた方法で配置していた。今後の課題としては、管理栄養士の資格取得に向けて、管理栄養士の教育内容や職務等の情報を、入学前あるいは入学後の早期に提供することで、学習に対するモチベーションの維持・向上に繋がる可能性からその必要性が示されたが、さらなる検証が必要である。

#### A. 背景と目的

平成12年の栄養士法改正により、管理栄養士の定義が明確化され、管理栄養士の養成教育においてもカリキュラムが大きく見直された。改正の趣旨には、「栄養評価に基づく適切な指導を行うための高度な専門的知識及び技術を持ち、傷病者に対する療養のため必要な栄養の指導等の業務に対する管理栄養士の育成を図るものである」と示された。その後、平成17年の介護保険制度の改正では、介護保険施設において従来は給付の対象であった食費の自己負担化が行われたことに伴い、高齢者の低栄養状態の改善を目的とした栄

養ケア・マネジメントが介護報酬として評価されるようになった。そして、栄養ケア・マネジメントに関する診療報酬及び介護報酬の改定が繰り返され、管理栄養士は、医療、介護、福祉の場において、多職種との連携により必要不可欠な専門職であることが期待されている。こうした流れは、管理栄養士には、これまで以上に他の医療職をはじめとした専門職と協働するための、より高度な知識と技術が必要とされ、複雑な栄養課題に対応できる管理栄養士の養成が社会的要請となっている。

一方で、大学全入時代を迎え、多くの大学で高等学校により異なる履修状況や多

様な大学入試制度により、入試によって入学者の学力水準を担保することが難しくなっており、学生の学力水準の維持が喫緊の課題となっている。この課題解決に向け、推薦入試やAO(Admissions Office)入試などにより、早期に入学が決まる高校生を対象とした入学前教育や、高等学校での未履修科目および基礎的な学力に問題を持つ入学者への対応として、高等学校の学習内容の補習・補完教育への取組を行う大学が増えてきている。

文部科学省平成25年度先導的の大学改革推進委託事業の一環として「大学における特色ある教育事例の把握等に関する調査研究」が行われ、この調査においても、リメディアル教育、初年次教育、教養教育の充実や基礎学力の向上に向けた取組が紹介されている。また、日本リメディアル教育学会では、日本のすべての大学に対して、入学前教育、プレースメントテスト、リメディアル教育についてのアンケート調査を平成23年に実施しており、アンケート結果と共に各大学の事例を発表している。しかしながら、これらの報告においては、医療系や農学系の大学での取組は一部に留まり、管理栄養士養成施設に特化した入学前教育、入学後教育に関する調査・報告は行われていない。

そこで本研究では、令和6年度厚生労働科学研究費補助金(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)「管理栄養士の社会的需要を見据えた管理栄養士養成施設における基礎学力向上と養成教育の効果的な連動に向けた研究(24FA1011)」の一環として、管理栄養士養成施設を対象に実施した「入学前教育

および入学後教育に関する管理栄養士養成大学の実態調査」の結果を踏まえ、管理栄養士養成施設において入学前教育および入学後教育を先駆的に推進している大学に対しインタビュー調査を実施し、入学前および入学後教育の体制や取組の状況を聴取し、課題分析及び今後の展開について検討し、論点整理を行うことを目的とした。

## B. 方法

### B-1. 対象施設及びインタビュー対象者等

対象施設は、令和6年度厚生労働科学研究費(循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業)「管理栄養士の社会的需要を見据えた管理栄養士養成施設における基礎学力向上と養成教育の効果的な連動に向けた研究(24FA1011)」(同志社女子大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会(承認番号2024-15:2024年8月29日承認 変更届:2024年11月6日承認))の実態調査において、本調査研究の全体的なタイムスケジュールを考慮し、再案内状を送付する前までにインタビュー調査への協力が可能との回答があった17大学(国公立4大学・私立13大学)より、研究代表者および研究分担者が所属する大学は除外、入学前教育・入学後教育の実施状況・取組内容、大学規模、各県1大学、国公立大学と私立大学を混合の選択条件により、7大学(国公立2大学・私立5大学)を選定した。さらにインタビュー調査の協力依頼に対し、文書により同意が得られた5大学(国公立2大学・私立3大学)を対象とした(図1)。インタビュー対象者は、管理栄養士養成施設の

学科長もしくは学科長職に相当する教員または学科長等が指名した教員をインタビュー対象とした。インタビューは、令和7年1月から3月の期間に実施した。

## B-2. 調査方法

インタビューガイドを用いた半構造化インタビューを対面方式により実施した。インタビューは、主インタビューと副インタビューの2名で行った。対象者に対し、倫理的配慮に関する事前の説明と研究協力の同意の確認後に、インタビューガイドに沿ったインタビューを実施し、録音を行った。インタビューの終了後、録音した電子媒体をパスワード付の電子ファイルとして格納し、個人情報保護管理規定に基づいて逐語録から概要表を作成した。

## B-3. インタビューの内容

インタビューの内容は、管理栄養士養成施設における入学前教育および入学後教育の体制や取組の状況を聴取し、以下の①～⑤の要素を基本に、具体的な実践状況を詳細に把握できるようにインタビューを実施した。

- ①入学前および入学後教育の実施について
- ②入学前および入学後教育の現在の体制について
- ③入学前および入学後教育実施の取組手順について
- ④入学前および入学後教育実施による効果判定および効果について(客観的、主観的、教員および学生の意見・要望等を含めて)
- ⑤今後の入学前および入学後教育のあり

方や課題について

なお、インタビュー内容の標準化に向け、担当するインタビュアーに対し、事前に説明会を行った。

## B-4. 倫理的配慮について

本研究は、愛知淑徳大学大学院健康栄養科学研究科倫理委員会の承認を得て実施した(令和6年12月17日第2024-01号)。

## C. 結果

インタビュー対象となった5施設の収容定員数を含む入学前教育および入学後教育の特性を表1に示した。

個々の施設のインタビューの概要は、次に示すとおりであり、詳細は、表2-1から表2-5に示した。

### 【公立1】

(インタビュー日:令和7年2月17日)

入学前教育は、専願入試である特別選抜合格者のみを対象としており、内容は、所属する高等学校の「化学基礎」、「生物基礎」、「化学」、「生物」の教科書および問題集を使って自主学習を行う課題であり、入学後にノートの提出を求める。また、入学時に、「化学基礎」、「生物基礎」と「生物」の範囲のプレースメントテストを実施しており、入学前の学習成果を確認している。

入学後教育は、教養科目の選択科目として、1年生前期に「自然科学Ⅰ(化学)」、「自然科学Ⅱ(生物学)」、1年生後期に「自然科学演習」を開講している。これらの3科目は、選択科目としているが、全員が履修するように指導を徹底している。高等学校

までの基礎学力の補完と大学での専門教育への導入準備としての科目である。

理科分野以外の入学前教育の必要性としては、入学後、管理栄養士養成の教育内容に違和感を抱く学生もいることから、高等学校のときから管理栄養士や栄養士の職務等についての情報を提供することが必要だとの意見が述べられた（表2-1）。

#### 【公立2】

（インタビュー日：令和7年3月6日）

入学前教育は、学科単位として、年内に実施している推薦入試の合格者を対象に、入学後の学習内容に関する情報提供を目的として、化学の基礎的な内容を学習できる図書を紹介している。推薦図書に関しては、案内のみであり、入学前に対象学生とのやり取りは行っていない。

一方、入学後教育では、専門科目に入るまでの基礎的な知識の習得を目的として、全学共通科目群の中に、1年生前期の必修科目として「基礎有機化学」、「細胞生物学」を開講している。さらに、選択必修科目として「基礎有機化学実験」、「生物学基礎実験」の実験科目も開講しており、栄養学科の学生は1年生前期に全員が履修するよう指導している。

また、管理栄養士の資格を取得することに対してモチベーションが低い学生への対応策として、2、3年前から1年生前期にオムニバス形式の「栄養管理学概論」を開講している。教員それぞれの切り口で管理栄養士の幅広い職務等について講義し、モチベーションを保つための仕掛けとしている（表2-2）。

#### 【私立1】

（インタビュー日：令和7年1月27日）

入学前教育では、年内入試合格者を対象に、化学(化学基礎を含む)と生物(生物基礎を含む)の大学オリジナルの問題集を郵送し、元高校教諭による添削指導を、繰り返し4回実施している。入学前教育の実施後に、高校生に対し満足度のアンケートを実施しており、受講した学生の満足度は高い。

一方、入学後教育では、「生化学」、「食品学」、「基礎栄養学」および「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」を学修するための基礎となる授業内容として、1年生前期に、「化学入門」と「人体生物の基礎」の選択科目を配置し、積極的な履修を推奨している。カリキュラムの特徴として、基礎科目を重視した医療分野での活躍を見据えた教育体制を構築している。

また、理科分野以外の入学前教育の必要性としては国語力を挙げ、さらに管理栄養士養成のカリキュラムでは、卒業論文を必修とすることの重要性について言及した（表2-3）。

#### 【私立2】

（インタビュー日：令和7年2月10日）

入学前教育は外部委託し、年内入試の合格者を対象として、委託業者の教材を用いた動画学習の受講を推奨している。受講は任意としているが対象者の約8割が受講している。

国語力および基礎計算力の向上を含んだ栄養系の内容を踏まえた生物、化学の單元の中から、それぞれ4回ずつの講座を自身で選び学習する形式である。受講者に

は、学習を終了した旨の連絡とレポートの提出が求められる。入学前教育を受講した学生の効果・成果の確認は、委託業者から受講者の特性を示すデータがフィードバックされ、それをを用いて毎年6月頃に学科としてFD活動を行っている。

入学後教育は、1年次に大学全体の共通教育の高大接続分野として開講している「生物学概論Ⅰ」(前期)と「生物学概論Ⅱ」(後期)、「化学概論Ⅰ」(前期)と「化学概論Ⅱ」(後期)は、いずれも学部の履修指導の際に必ず履修するように指導している。学部の専門教育科目として、「生物物理化学」、「生物有機化学」を必修科目として開講している。

理科分野以外の入学前教育の必要性としては、プレゼминаールのような形で、ノートの取り方、授業受講の心構えなど、大学における授業にスムーズに取り組むための授業があると良いとの意見があった(表2-4)。

### 【私立3】

(インタビュー日:令和7年3月3日)

理科分野に特化した入学前教育は、実施していない。しかし、年内入試である推薦入試の合格者を対象として、栄養に興味を持てる様々な視点のレポート課題を、学科内の教員が輪番で担当している。年内入試の合格通知と同時に課題を出して、年内にレポートを回収、担当教員は、全員の提出物に対しコメントを記載し、入学前までにフィードバックを終える流れである。合格通知から入学までの期間が長いことから、入学までの意識づけや動機付けとしてのやり取りだと理解している。

入学後教育は、1年生の基礎教育科目として「基礎化学」、「有機化学」、生物系の科目として「生命科学」を選択科目として開講している。履修指導により、毎年、全体の7割から8割程度受講している。

理科分野以外では、栄養に関する興味関心を高め、専門科目へスムーズに進んでいくことを目指して、1年次に「食日記」を課している。1年間実施される食日記の効果は、調理学および給食経営管理論への導入がスムーズになっている。自身を振り返る学生のコメントからも成長が感じられ、1年をかけて食と栄養に興味関心を持ち、評価することを学修する効果的な取組である(表2-5)。

### D. 考察

文部科学省は、中央教育審議会(中教審:第255号)において、今後の高等教育政策の方向性と具体的な方策について答申を示した。冒頭には、高等教育機関の役割として、学修者一人一人の可能性を最大限伸ばすことによって社会の発展の原動力となる優れた人材の育成、人類の知的資産の継承と未来を拓く新しい知の創造、知的資源を活用した社会の発展や文化の創造、国際協力への積極的な貢献等幅広いものであり、個人のみならず社会全体にも価値あるものであると示している。教育研究の「質」のさらなる高度化に向け、学習者本位の教育のさらなる推進を挙げ、ここに「高大接続を踏まえた大学入学者選抜等の改善」についての具体的な方針が示された。

高大接続の観点からは、1999年の中教審で示されており、「高等学校および大学の役

割分担の明確化と両者の教育の連携について」が掲げられた。私学高等教育研究所が実施した高大接続の取組の調査では、推薦入試での成績基準の要件化、初年次教育の必修科目化、入学前教育、学力別クラス分け等が調査され、学生の学力が低い学科ほど高大接続の取組の実施率が高かったと報告している。

本研究のインタビュー調査対象大学においては、それぞれ特色ある入学前教育が実施されており、すべての大学で実施されていた。入学前教育の設計にあたっては、高等学校の教育との接続の観点が重要であり、これまでの日本リメディアル教育学会が実施した調査報告において、ある大学は、「高等学校と大学の教員が連携して取り組み、高等学校と大学のギャップを分析した上で、その橋渡しとなるような教材を作成している」と述べており、本調査においても、元高等学校教諭と大学教員の共同で問題集を制作している大学が認められ、まさに高大接続の視点を見据えた取組であった。

一方、今後、必要な入学前教育として、挙げられたのは、国語力であった。日本語の読解力、論理的な思考などが低下傾向であるとの意見が多く述べられた。また、管理栄養士養成校での教育内容や管理栄養士の職務などを入学前に提供することの必要性についての提案があり、これらを実践することにより、入学後の学修のミスマッチを回避することになるであろう。

入学後教育としては、1年次に、高等学校の理科分野の補完授業が多く大学の学修で実施されていた。化学と生物の内容を実験で確認する科目を配置している大学も複

数認められた。専門基礎科目へのスムーズな移行を目的として、履修指導が行われていた。また、給食経営管理論等の専門科目への移行を視野に入れた取組として、入学から1年間の食日記を課す取組がなされている大学があり、成果があることが伺えた。

高大接続の多様化に伴い、各大学の入試方式、入学者の基礎学力、教員のマンパワー等の状況に応じて、本研究の対象とした管理栄養士養成の大学において、それぞれ固有の取組があり、多様であることが示された。

本研究では、5事例のみの報告であることから、今後の事例の積み重ねは必須である。しかし、調査した5大学と同じような状況におかれている大学が、これらを「グッド・プラクティス」として共有し、管理栄養士養成施設の入学前教育および入学後教育の質の保証と向上に繋がることを期待する。そして、さらなる管理栄養士の専門教育の発展により効果的な連動を生み、ひいては、栄養管理を担う専門職としての強固な知識と技術が担保され、日本の健康な人、傷病者、障害者、妊産婦から高齢者までのすべての国民へ還元されることを願いたい。

## E. 結論

インタビュー対象となった5大学において、各大学の入試方式、入学者の基礎学力、教員のマンパワー等の状況に応じた固有の入学前教育が実践されており、「高大接続」としての入学前教育を重視していた。一方、入学後教育については、管理栄養士養成の専門基礎分野の学修に繋げる

理科分野の科目を、各大学の規模や組織に応じた方法で配置していた。今後の課題としては、管理栄養士の資格取得に向けて、入学前あるいは入学後の早期に、管理栄養士の教育内容や職務等を情報提供することで、学習に対するモチベーションの維持・向上に繋がる可能性からその必要性が示されたが、さらなる検証が必要である。

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

なし

### 2. 学会発表

なし

## G. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

該当なし

## H. 参考文献

- 1) 文部科学省 我が国の「知の総和」向上の未来像～高等教育システムの再構築～(答申)(中教審第 255 号)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1420275\\_00014.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1420275_00014.htm) (令和7年3月 20 日閲覧)
- 2) 日本リメディアル教育学会監修: 大学における学習支援への挑戦 リメディアル教育の現状と課題, 株式会社ナカニシ出版, 京都府, 2012.
- 3) 初年次教育学会: 進化する初年次教育, 世界思想社, 京都府, 2018.
- 4) 日本私立大学協会附置私学高等学校教育研究所監修 濱名篤、川嶋太津男、山田礼子、小笠原正明: 大学教育を成功に導くキーワード 30, 学事出版株式会社, 東京都, 2013.

- 5) 初年次教育学会: 初年次教育の現状と未来, 世界思想社, 京都府, 2013.
- 6) 文部科学省: 大学教育の質的転換に向けた実践ガイドブック 大学における特色ある教育事例の把握等に関する調査研究, 株式会社リベルタス・クレオ, 東京都, 2014
- 7) 文部科学省初等中等教育と高等教育との接続の改善について(答申)  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm) (令和7年3月 20 日閲覧)

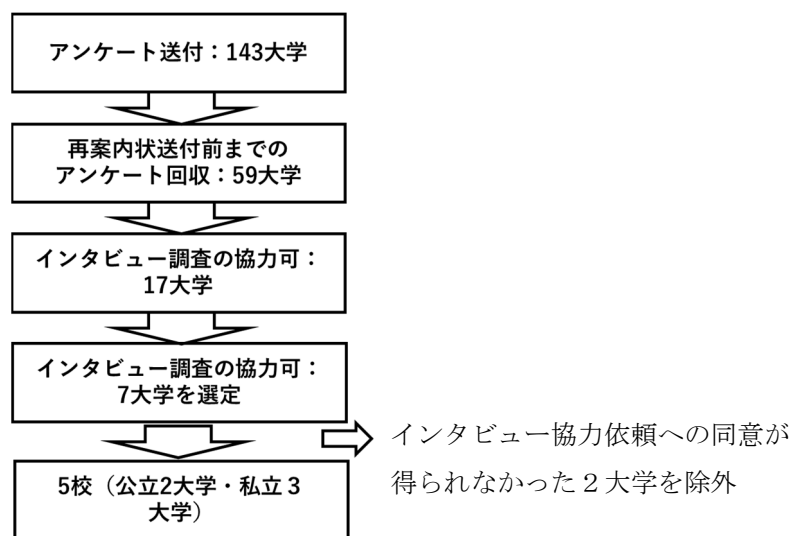


図 対象施設の選定

表 1 対象施設の特性

	大学の規模 (収容定員)	一般入試				入学前教育					入学後教育		プレースメントテストの実施
		化学（化学基礎を含む）を試験科目としているか	生物（生物基礎を含む）を試験科目としているか	化学の試験範囲	生物の試験範囲	実施主体	化学基礎	化学	生物基礎	生物	化学	生物	
公立1	4000人未満	必須	必須	化学または化学基礎	生物または生物基礎	学科	○	○	○	○	選択	選択	化学基礎、生物基礎、化学、生物
公立2	4000人未満	選択	選択	化学基礎	生物基礎	未実施	/	/	/	/	講義：必修、実験：選択必修	講義：必修、実験：選択必修	実施していない
私立1	4000人未満	選択	選択	化学基礎	生物基礎	学科	○	○	○	○	必修	なし	実施していない
私立2	8000人以上	選択	選択	化学	生物	大学	○	○	○	○	選択	選択	実施していない
私立3	4000人未満	選択	選択	化学	生物	未実施	/	/	/	/	選択	選択	実施していない

表 2-1 公立1のインタビュー結果のまとめ（インタビュー日：令和7年2月17日）

<p>入学前教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育担当は、入試委員長である。体制は、大学として実施している。</li> <li>・専願入試である特別選抜合格者のみを対象としており、合格発表の12月頃から入学までを実施期間としている。</li> <li>・合格の案内の送付と同時に、入学前教育の内容を通知している。内容は、所属する高等学校の「化学基礎」、「生物基礎」、「化学」、「生物」の教科書および問題集を使って自主学習を行い、入学後に課題の提出を求める。</li> <li>・課題の提出は、1年前期科目「自然科学Ⅰ（化学）」の初回の授業で提出することになっている。</li> <li>・自主学習を促す通知を送り、その後の学習内容の進捗状況を確認する仕組みはない。さらに、入学までに、入学前教育の終了時点の知識の定着具合を確認する仕組みもない。</li> </ul>
<p>入学後教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教養科目の選択科目として、1年生前期に「自然科学Ⅰ（化学）」、「自然化学Ⅱ(生物学)」、1年生後期に「自然科学演習」を開講しており、これらを入学後教育科目としている。</li> <li>・「自然科学演習」は、化学と生物の内容を実験で確認するという授業内容である。</li> <li>・上記の3科目は、選択科目としているが、全員が履修するように指導を徹底している。高等学校までの基礎学力の補完、大学での専門教育への導入準備としての科目である。</li> <li>・学習成果の確認方法としては、定期試験、確認テスト、課題提出などから総合的に行っている。</li> <li>・「自然科学Ⅰ（化学）」と「自然科学演習」は、食品衛生監視員および食品衛生管理者の資格取得の必須条件の科目となっており、履修に向けてのモチベーションが高い。不認定の学生は皆無である。食品衛生監視員の資格は、全員が取得して卒業している。</li> </ul>
<p>教育効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学時に、「化学基礎」、「生物基礎」と「生物」の範囲のプレースメントテストを実施しており、入学前の学習成果を確認している。対象は一般選抜も含めた全ての入学者であり、高等学校までの学力の定着を図り、入学後教育に繋げていく目的で実施している。</li> <li>・プレースメントテストの結果で、特別選抜入試と一般入試の入試種別で学生の学力差はない。特別選抜入試の学生であっても、高等学校で「化学基礎」に加え「化学」を履修していることが差がない要因だと考える。</li> <li>・主観であるが、入学前教育と入学後教育を実施することによって、高等学校までの基礎学力が定着するようになり、大学での専門教育の導入の準備にもなっていると感じる。具体的にはそれぞれの専門科目で必要とされる理科の基礎的な知識や実験を行って、その結果を解析してまとめ上げる手法や考え方を身につけることができているのではないかと、希望的に考えている。</li> <li>・入学前教育の課題と入学後教育として開講している3科目について、学生が負担を感じている様子はなく、評判は悪くない。</li> <li>・入学前教育、入学後教育の効果の測定は十分にできていないと思い、今後は評価方法を含めて検証が必要だと考えている。</li> <li>・今年度から学修成果の自己評価と実際の教員からの成績評価を突き合わせながら、個々の学生について面談することを実施している。</li> </ul>
<p>理科学科以外の必要な入学前教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「自分は料理ができます、好きです」等の気持ちで入学し、教育内容に違和感を抱く学生もいる。高等学校のときから管理栄養士や栄養士についての情報を提供することも必要だと感じている。</li> <li>・学生の論理的な思考力、それから日本語の読解力が足りていないと感じており。今後は、このような内容も入学前課題として実施してはどうかと考える。大学院生でもなかなか日本語を書く力などが不足していると感じる。</li> </ul>
<p>その他意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入試の方法の適切さも検討し、随時改善していかなくてはいけないと感じている。</li> </ul>

表 2-2 公立2のインタビュー結果のまとめ（インタビュー日：令和7年3月6日）

<p>入学前教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学前教育は、理科、理科以外のいずれの科目も、学科および、全学として実施していない。</li> <li>・学科単位として、年内に実施している推薦入試の合格者を対象に、入学後の学習内容に関する情報提供を目的とした、化学の基礎的な内容を学習できる図書を紹介している。</li> <li>・学科からは、文書により大学入学後に栄養学を修める上で基礎的な化学や生物の知識が必要となること、これらの科目を不安に思う者は入学前にこのような図書を読んで復習しておくことを推奨している。</li> <li>・推薦図書に関しては、案内のみであり、入学前に対象学生とのやり取りは行っていない。また入学後に実施状況の確認、推薦図書の内容をふまえた試験等は行っていない。</li> </ul>
<p>入学後教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学生の内訳は、推薦入試の合格者が半数、一般入試の合格者が半数であるが、入学後の学力に差はないと感じている。</li> <li>・専門科目に入るまでの基礎的な知識の習得を目的に、入学後教育を行っている。</li> <li>・人間総合教育科目（全学共通科目群）の中に、1年生前期の必修科目として「基礎有機化学」、「細胞生物学」を開講している。さらに、選択必修科目として「基礎有機化学実験」、「生物学基礎実験」の実験科目も開講しており、栄養学科の学生は1年生前期に全員が履修するよう指導している。</li> <li>・上記科目の授業は、学部共通科目や連携実践教育科目を担う教育部門の教員が担当しており、講義科目と実験科目は同じ教員が教育を担っている。基礎実験では器具の扱い方やレポートの書き方等の基本を学修する。教員による学生のフォローが大変細やかであり、専門分野を担当する学科の教員との情報交換ができています。</li> <li>・大学の授業について行けない学生は、理科科目の学力不足ではなく、管理栄養士の資格を取得することに対してモチベーションが低いためである。対応策として、2、3年前から1年生前期にオムニバス形式の「栄養管理学概論」を開講している。教員それぞれの切り口で管理栄養士の幅広い職務等について講義し、モチベーションを保つための仕掛けとしている。</li> </ul>
<p>教育効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「基礎有機化学」、「細胞生物学」、「基礎有機化学実験」、「生物学基礎実験」の理解度、習熟度について直接的な評価はしていないが、学生による授業評価アンケートでは好評であり、ネガティブなコメントはない。</li> <li>・専門基礎分野の「生化学」、1年次に開講する専門科目の「基礎栄養学」において、授業後に学生が提出するリアクションペーパーからは、全学共通科目「細胞生物学」との内容との繋がりに学生自身が気づいていることが確認でき、入学後教育後教育としている全学共通科目と管理栄養士の専門基礎科目が上手く連携できている。</li> <li>・実践系科目である専門分野の学生のリアクションペーパーでは、専門基礎分野と専門分野の科目の繋がりも理解できている。</li> </ul>
<p>理科学科以外の必要な入学前教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個々の教員からは、英語、統計学、プレゼンテーション力や文章力についての意見があり、1年前に全学的な入学前教育の実施について検討したが、科目の統一が難しく実施に至らなかった。栄養学科の教員に入学前教育の必要性を調査したが、絶対に必要という意見はなかった。</li> </ul>
<p>その他意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他の医療関連学部で教育しているような人材管理や物の管理についても教育が必要である。</li> </ul>

表 2-3 私立1のインタビュー結果のまとめ（インタビュー日：令和7年1月27日）

<p>入学前教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教育担当は、学科長と学部長の2人である。大学全体として入学前教育は実施していない。</li> <li>・対象は、年内入試合格者であり、専願制の合格者は必須、併願制の合格者は任意としている。一般入試の合格者は対象としていない。</li> <li>・化学と生物の2教科について、元高校教諭と契約し、問題の添削指導を入学年度前年の12月から、4回繰り返し実施している。学科の教務委員を介して、入学生と元高校教諭と郵送によるやり取りとしている。</li> <li>・元高校教諭とは、毎年9月に打ち合わせを実施し、前年度のフィードバック（アンケートを実施）を基に問題内容を決定する。高校教諭は丁寧な添削を行い、学生の満足度も高い。</li> <li>・入学前教育の指導期間中の脱落者は若干名である。</li> <li>・強制ではないが、元高校教諭が推薦する参考書の情報を案内している。</li> <li>・高等学校の教員へ質問をする高校生もいることから、高等学校に対し、入学前教育を実施している旨の文書を送付しており、丁寧な対応がなされている。</li> </ul>
<p>入学後教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学時のガイダンスにより、入学後教育として位置づける選択科目「化学入門」と「人体生物学の基礎」について、積極的に履修をするように指導を行っている。</li> <li>・入学後教育の担当は決めておらず、授業担当者の裁量に委ねている。</li> <li>・化学分野では、1年生前期に「化学入門」と「基礎化学」を連続した時間割に組み込んでおり、これらの科目は同一の教員が授業を担当し、一貫した教育を行っている。「基礎化学」は、必修科目としており、「生化学」、「食品学」、「基礎栄養学」の基礎となる知識の習得を図っている。</li> <li>・生物分野では、「人体生物学の基礎」を通じて、高等学校の復習を行い、「解剖生理学」の学習の準備を行っている。「人体生物学の基礎」と「人体の構造と機能及び疾病の成り立ち」を担当する教員は同一であり、一貫した教育を実施している。</li> <li>・カリキュラムは、基礎科目を重視し、医療分野での活躍を見据えた教育体制を構築していることが特徴である。</li> </ul>
<p>教育効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学前教育の実施状況と専門基礎科目の再試験対象者が一致しており、主観として効果があると感じている。</li> <li>・入学前教育実施後の問題難易度についての満足度アンケートの結果：70%以上が「満足」、20%程度が「難しい」、20%以下が「易しい」と回答している。ほとんどの学生から勉強になったとの意見がある。</li> <li>・入学前教育は学習面での効果に加え、大学で勉強することの意識付け、入学までのモチベーション維持にも効果がある。また高等学校との連携強化にも繋がっている。</li> </ul>
<p>理科学目以外の必要な入学前教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・正しい文章が書ける力を身に付けていることは重要である。文章を書く、文章をまとめる能力は必須であることから国語力を身に付けなくてはならない。</li> </ul>
<p>その他意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・高等教育機関として、「卒業論文」は、国語力とプレゼンテーション力の集約であり、大学生として卒業論文は必修とすべきと考える。</li> <li>・「卒業論文」を必修にしないと、論文を読む経験が少なく、医療・介護の現場に就職した際には、「エビデンス」の意味さえも理解できない管理栄養士になりかねないと危惧する。</li> </ul>

表 2-4 私立2のインタビュー結果のまとめ（インタビュー日：令和7年2月10日）

<p>入学前教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部の入試委員が事務部門と共に担当し、合格通知と共に委託業者の教材を用いた動画学習の受講案内を送付している。受講費用は、学生側が全金額を負担している</li> <li>・対象は、年内入試である一般入試前期および一般入試中期の合格者としている。受講は任意としているが、全員の受講を推奨している。2024年度入学生の入学前教育の対象者に対する受講割合は8割程度であった。</li> <li>・入学前教育の受講については、入学試験の面接等で適宜案内している。受講案内への返答がない学生に対しては、委託業者を通し電話で再案内し受講率を高めている。</li> <li>・国語力および基礎計算力の向上も含み、栄養系の内容を踏まえた生物、化学の単元の中から、それぞれ4回ずつの講座（DVD動画の視聴）を自身で選び学習する形式である。</li> <li>・テキストに記載されている内容のうち、最低限受講すべき箇所を指示している。</li> <li>・受講者には、学習を終了した旨の連絡とレポート等の提出が求められる。入試の種別により、提出期限を分けて設けている。業者により提出の催促を実施しているが、併願する他大学の入学試験の勉強と入学前教育の課題の期限が重なるため催促は困るという声もある。</li> <li>・入学前教育は、10年程度の実績であり、実施のきっかけは、大学入学後に授業について来られない学生が散見されたためである。入学前教育の必要性は感じている。</li> </ul>
<p>入学後教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・1年次に大学全体の共通教育の高大接続分野として開講している「生物学概論Ⅰ」（前期）と「生物学概論Ⅱ」（後期）、「化学概論Ⅰ」（前期）と「化学概論Ⅱ」（後期）は、いずれも学部の履修指導の際に必ず履修するように指導している（履修要項に明記）。</li> <li>・「生物学概論Ⅰ・Ⅱ」と「化学概論Ⅰ・Ⅱ」は、教養科目の位置づけとして全学の学生を対象に開講されており、主に高等学校の理科の範囲を総復習する内容で授業が構成されている。本来であれば栄養系の学生は濃度計算などができないと困るが、教養科目の位置づけで開講されている授業に対して、授業内容の変更を求めることは難しい。</li> <li>・学部の専門教育科目として、「生物物理化学」、「生物有機化学」を必修科目として開講している。</li> </ul>
<p>教育効果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学前教育を受講した学生の効果・成果の確認は、委託業者から受講者の特性を示すデータがフィードバックされ、それを用いて毎年6月頃に学科としてFD活動を行っている。一方、個々の学生の効果の把握は難しいと感じている。学生からのコメントとしては、良かったという意見もある。</li> <li>・文章を読み解く力や理解度などについて個々の学生のデータがフィードバックされるが、全体像の把握に留まり、個別に細かなところまで分析することは困難である。本来であれば受講前後の評価等を行いたいと考えているができていない。</li> <li>・入学後教育では、各科目で小テストや定期試験などで知識の定着具合を評価している。今後の取り組みとして、学年ごとの到達目標を設定することも検討している。</li> <li>・化学および生物の学力と他の1、2年生の科目の成績に関する分析は実施していない。また、専門基礎科目と専門科目との学力に関する分析は実施していない。</li> <li>・理科科目の得点が高い学生は、その他の科目の成績も良いという関連性はあるかもしれないが、分析はしていない。</li> <li>・教員と学生が伴走する形での指導が理想であり、担任制をとっているが、個別の学習支援の体制は難しく、知識の定着を促す工夫にも限界がある。</li> <li>・教養科目担当の教員と専門科目担当の教員との情報交換は不十分である。</li> </ul>
<p>理科学科以外の必要な入学前教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレゼминаールのような形で、ノートの取り方、授業受講の心構えなど、大学における授業にスムーズに取り組むための授業があっても良い。</li> <li>・文章をまとめて表現する能力が低いと感じているため、国語力として文章表現能力の基礎学力も必要である。</li> </ul>
<p>その他意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学部では基礎は実施するが、専門性の高い基礎科目のより高度な内容は各大学の特徴として、大学院で実施したほうが良い。</li> </ul>

表 2-5 私立3のインタビュー結果のまとめ（インタビュー日：令和7年3月3日）

入学前教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対象は、年内に実施される推薦入試の合格者であり、栄養に興味を持ってもらえるような様々なレポート課題を出している。</li> <li>・全学の出組として実施しており、郵送および課題の回収等の業務は、入試業務の一環として事務局が担当している。</li> <li>・年内入試の合格通知と同時にレポート課題を出して、入学予定者からは、年内にそのレポートが提出される。担当した教員は、全員の提出物に対しコメント等を記載し、入学前までにフィードバックを終える。</li> <li>・教育担当者は、学科内の教員で輪番としている。</li> <li>・課題の内容は、担当する教員によって違う。例えば、自分の食べているものを食日記として記録し、自分の感想をつけて自身の食生活を見直すという課題、新聞から栄養に関するトピックをいくつか取り上げて、そのトピックに関して自分で調べてレポートにまとめる等である。震災時の管理栄養士の業務、化学等の専門領域に特化した課題が出される年もある。</li> <li>・合格通知から入学までの期間が長いので、入学までの意識づけや動機付けとしてのやり取りだと理解している。</li> </ul>
入学後教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学後教育としての科目の設定は、国家試験の結果や就職状況等を加味して、毎年この科目の設定のままでよいのかを学科で話し合っている。</li> <li>・現在、1年生の基礎教育科目として「基礎化学」、「有機化学」、生物系の科目として「生命科学」を選択科目として開講している。基礎科目が始まるのと同時、もしくはそこが難しくなる前に受けてほしいと考えている。</li> <li>・1年生の担任と教務担当の教員で、1年生の4月のオリエンテーション時に、上記の科目についてそれぞれ説明し受講するように指導している。高等学校で文系だった学生や専門系の高等学校から入学する学生が増えていることから、特に、これらの学生に履修指導を行っている。毎年、全体の7割から8割もしくはほぼ全員履修する年もある。</li> <li>・授業では、3～4回の授業単位で小テストを実施しており、反復学習を心がけている。</li> <li>・理科科目以外では、コミュニケーション力の向上や、管理栄養士の職業に興味関心を持てるような教育として、学科でイベントや講演会などを企画運営している。</li> <li>・栄養に関する興味関心を高め、専門科目へスムーズに進んでいくことを目指して、1年次に「食日記」を課している。内容は、毎月5日間、自身が食べたものを記録し、併せて、自身の振り返りのコメントを記録するものである。入学してから、5月から7月は、食事を記録するだけ、後期の10月から12月は、秤量法とまではいなくても、目安量を記載するよう指導している。毎月、管理栄養士の教員を中心に、学科の全教員で内容をチェックしフィードバックしている。</li> </ul>
教育効果	<ul style="list-style-type: none"> <li>・入学後教育について、管理栄養士の専門基礎科目を学修するための知識に到達していると感じる。構造式が苦手な学生もあり、入学後教育として開講している科目は、効果があると感じている。</li> <li>・学生は、入学後教育の科目の履修により、次から始まる専門科目の準備ができていると感じているようだ。</li> <li>・学習管理システムを利用し、任意ではあるが、毎回の授業に対し質問を受け付けており、個別の質問に対応をしている。</li> <li>・食日記の効果は、調理学および給食経営管理論への導入がスムーズになっていると感じる。自身を振り返る学生のコメントからも成長を感じられる。1年をかけて食に興味関心を持ち、さらに評価することを学修する取り組みである。</li> </ul>
その他意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報系の科目で、基礎科目として3科目程度を計画している。管理栄養士に必要な統計学的な科目として4年間で4科目程度を準備している。</li> </ul>